

貝塚市の引揚者住宅

1. 「引揚(者)」とは

日本の敗戦により第二次世界大戦が終わり、海外にいた多くの日本人が日本へ帰りました。これを「引揚(ひきあげ)」といい、帰ってきた人を「引揚者(ひきあげしゃ)」と呼びます。

当時、海外には約 660 万人の日本人がいました。特に中国東北部(当時の「満州」)に多くおられた人々は、戦争の混乱を何とか生き延び、終戦後、寒さや空腹と闘いながら、何百キロも歩いて港に向かい、帰国をめざしました。その中には、子どもを守るために現地の人に預ける親もいました。地元の人が食べ物や水を分けて助けてくれたこともありました。

このような苦難の中、日本へ無事帰ることができた人たちは、福岡県の博多や長崎県の佐世保、京都府の舞鶴など、全国 18 の港から帰国しました。昭和 25(1950)年には舞鶴だけが引揚船を受け入れる港になり、昭和 33(1958)年まで、合計約 66 万人もの引揚者が舞鶴から上陸しました。舞鶴の人々は引揚者にお茶やふかした芋を振る舞い、港から駅へ向かう引揚者に「お帰りなさい!」「ご苦労さまでした!」などと書かれたのぼり旗をたてたり、歓迎やねぎらいの声をかけて温かく迎え入れ、ふるさとなど次の居住地へと見送ったそうです。

今、舞鶴港に、引揚やシベリア抑留の歴史的事実を後世に継承する舞鶴引揚記念館が建っています。



平成 27(2015)年に収蔵資料のうち 570 点がユネスコ世界記憶遺産に登録されるなど、平和の尊さを広く世界に発信しています。



舞鶴引揚記念館
京都府舞鶴市

2. 貝塚市にも建てられた「引揚者住宅」

引揚者は、現地に財産を置いてきたため、帰国後の生活はとてもしんどいものでした。国は全国に約 79,000 戸の「引揚者住宅」を建てて支援しました。大阪府では 44 か所に約 1,900 戸、貝塚市では津田、半田、三ツ松、東、脇浜に府営・市営住宅が合わせて 110 戸建てられました。家は木造の平屋、2 戸で 1 つの建物となっている簡単な造りでした。引揚者にとっては新しい生活の出発点となる大切な住居でした。



当時のようす
昭和56(1981)年
11月19日撮影
(提供:大阪府)



(「貝塚市の70年」平成25年貝塚市発行 p.130 第2章第1より)

3. 最後の1戸となった貝塚市の「引揚者住宅」

令和7(2025)年、貝塚市半田海岸寺山にある「大阪府最後の引揚者住宅」は、戦後の歩みを静かに見守っている建物です。



大阪府最後の引揚者住宅 全体
貝塚市半田海岸寺山

4. 住んでいた方の思い

現在住まわれている方(令和7(2025)年当時88歳)は、8歳のときに終戦を迎えました。熊本県で暮らした後、家族で貝塚に移り住んだそうです。

その方の兄は満州で憲兵として働いていましたが、終戦後にソ連の捕虜となり、シベリアの収容所での長く厳しい抑留生活を送った引揚者でした。姉は満州鉄道の従業員で、暴力などを受けないために女性とわからないよう丸坊主にし、命がけで引き揚げてきたそうです。

海岸寺山の引揚者住宅には多くの引揚者が暮らしていましたが、戦争の話を詳しく語る人はほとんどいませんでした。「とても寒かった」「いろいろあった」と話すだけで、つらい記憶を胸にしまっていたのだと思われます。

(貝塚市教育委員会 郷土資料室 令和7年度取材記録より)

5. 平和への思い

引揚者住宅で育ったこの方の息子さんが語ってくれました。

「戦争のあったことを、あの時代の方が悪かったからだ、今の私たちは思いがちですが、ごく普通の人たちが戦争に巻き込まれていったのです。一番こわいのは、言いたいことが言えない社会。自由に意見を言えることこそ大切です。」

みなさんは、この言葉をどう受け止めますか。

🔍調べてみよう

- ・シベリアの収容所での抑留生活について
- ・今、世界で起こっている戦争や紛争でつらい思いをしている人々について

🤔考えてみよう

- ・引揚者は、帰国時や戦後をどのような気持ちで生き抜いていったのか
- ・私たちの社会が再び戦争に巻き込まれないため、私たちにできることは何か